

# 大学生が見る枝幸の観光資源 —令和4年度地域資源活用より

山川和彦

麗澤大学外国語学部

**要旨** オホーツクミュージアムえさしの事業「歴史と文化が人をつなぐ交流促進事業」の一環として、麗澤大学山川和彦ゼミが令和4年度に行った実習活動を通して、大学生が感じた枝幸町の観光資源について考察した。学生はオホーツク海をはじめ自然風景に観光資源の価値を見だし、また住民にとっては日常的な事象が町外からの旅行者に意味ある物になることが確認できた。

**キーワード**：地域資源活用，地方創生，探求活動，博物館

## 1. はじめに

本稿は、令和4年度に行った枝幸町・麗澤大学地域資源活用実習に参加した学生の活動を記録すると同時に、学生の視点から枝幸町の観光資源のありようを考察するものである。

枝幸町とオホーツクミュージアムえさしは、平成30年度より「歴史と文化が人をつなぐ交流促進事業」の一環として、枝幸町の潜在的な「地域資源」をふるさと教育や体験型観光、情報発信に活用するための「地域資源活用実習」を実施してきた。その枠組みで麗澤大学外国語学部山川和彦ゼミが活動している。同年9月には、歌登地区の「絶滅ほ乳類化石」をテーマとして、「地域資源の発掘」に取り組んだが、北海道胆振東部地震による停電のため、活動は一日で中止となった。翌令和元年（2019）には、町の豊かな自然資源や食材を体験型観光として活用する検証実習を、オホーツク枝幸ブランド推進本部と共同で実

施した<sup>注1</sup>。その後令和2年は新型コロナウイルス感染症に伴い中止となった。しかし、山川ゼミでの教育活動は継続し、枝幸町を含むオホーツク沿岸の市町村の観光資源、枝幸町の技能実習生、環境施策などに関し、町担当部署の協力の下、探求してきた。令和3年に関しても現地実習は中止となったが、枝幸ホタテの活用の可能性を広げる観点から、学生たちが様々に調理する動画撮影を行うなどオンライン交流を継続した。この間、北海道枝幸高等学校との交流活動もあり、高校生が撮影した枝幸の写真コンテスト、大学生による高校生への食生活などに関するアンケートの実施と発表会などが行われた

令和4年度は、学生9名<sup>注2</sup>が参加し、枝幸の

注1 活動については山川和彦（2020）「北海道枝幸町における学生との地域資源活用実習報告」『枝幸研究 11』pp.33-38。また、活動はバンコクで行われたタイ日研究ネットワーク Thailand～2019年度研究大会にて発表した。

注2 3年生6人、4年生3人。4年生は昨年度一年間枝幸町に関する学習をしてきた。

魅力を探究し、宣伝活動に生かせる動画を作成する活動を行った。詳細は次章に記載する。

## 2. 令和4年度の実習について

令和4年度は、新型コロナウイルス感染症の動向が安定してきたことから、実習を実施した。まず実習の目的として、オホーツクミュージアムえさしと協議し、確認したのは次の3点である。

### (1) 地域の歴史・文化資源の発掘

オホーツク文化に代表される「地域の特色ある埋蔵文化財」や近代化遺産・産業遺産を学習する。具体的にはミュージアムの展示および収蔵品の見学、目梨泊遺跡を中心とした遺跡探検、ドローン体験、沖縄の沢、旧国鉄興浜北線跡の見学が含まれる。

### (2) 地域の食材・観光資源の発掘

枝幸町を取りまく豊かな自然環境を「地域の特色ある観光資源」として活用することを目標とし、視察、体験学習を行う。枝幸港でのホタテの水揚げ、孵化場の見学、北見幌別川でのカヌー下り体験、ビーチコーミング、自然観察。養蜂業者と公共育成牧場の視察。食材に関しては、イクラ作りとホタテ貝剥き体験。

### (3) 特色ある地域資源の発信

上記2点の実習をもとに枝幸町の特色ある地域資源を、実習生各自の視点により映像化する。各自のスマートフォンにより撮影・編集し、30秒のCM動画とストーリーを持たせた3分程度の動画を作成し、町のプロモーションに活用する。

この活動の狙いは、首都圏の大学生が「外からの視点」「若者の視点」で枝幸町をどのように感じるか、つまり生活者が気づかない地域資源の評価、可視化にある。

枝幸町が連携するプログラムと合わせて、枝幸高等学校との交流活動も行われた。訪問前の7月に大学生の自己紹介動画を高校に送り、その学生の志向に合わせて枝幸観光を提案するもので、「えさし探求」の一環である。これは、高校生が「ふるさとを相対化」することを学び、地元を再認識させることになり、枝幸町が取り組んでいる「ふるさと教育」とも関連してくる。

具体的な日程は以下の通りである。

- 9月5日 枝幸町うたのぼりグリーンパークホテル到着
- 9月6日 午前：町長表敬訪問、オホーツクミュージアムえさし見学、午後：枝幸高等学校との交流授業。
- 9月7日 午前：神威岬、目梨泊遺跡、ウスタイベ千畳岩見学、三笠山展望閣訪問。午後：宗谷管内さけ・ます増殖事業協会徳志別川さけ・ます捕獲場見学、道の駅マリーンアイランド岡島立ち寄り、ビーチコーミング。
- 9月8日 午前：グループによる活動（①歌登を学ぶ：公共育成牧場、沖縄の沢 ②枝幸の自然を学ぶ ③市街地を学ぶ：神社、町並み、北見枝幸駅跡など）昼：枝幸港水揚げ見学、午後：ミュージアム収蔵庫見学、いくら作り体験
- 9月9日 2チームに分かれカヌー体験。その間、養蜂業者訪問、ドローン体験、ホタテ貝殻剥き体験。
- 9月10日 出発

## 3. 学生の枝幸受容

実習を行った学生には、帰京後の報告書作成と動画制作を課した。この章では、そこに取り上げられた記述、動画のシーンを読み解くことで、はじめて枝幸町を訪問した学生が、どのように地域を受容したのかを考察する。その際に、アトキンソン(2015)が指摘している4つ観光要素、すなわち気候、自然、文化、食事のなかで、気候を除く3つの要素を参考にする。アトキンソン(2015)は学術的理論を示したものではなく、日本の観光をイギリス人の目から見たとき、観光立国のための方策を提言した書物である。上述の4つの要素は必ずしも目新しいものではないが、全国的な観光地としては認知されていない枝幸町の資源を再認識するに当たり、日本を外から見たアトキンソンの視点は、シンプルで考察基準とするに価すると判断した。

### 3.1 報告書に見る学生の地域受容

学生9名には、実習終了後おおむね一週間以内に活動報告書を作成するよう義務化した。ここではその報告書の中に記載されている内容を検証する。実習後、間もない期間に作成された報告書には、当該の学生にとって印象的であったものが記載されているとの仮定に基づくものである。今回提出された報告書は、報告書といっても客観的な活動記録ではなく、枝幸町の印象、体験した事項に関する説明と感想、謝意などが記載されている。

ところで、テキストの分析手法として、テキストマイニングがある。学生全体のテキストをフリーソフトを利用してテキストマイニングしてみたが、単語の頻出数や共起などは計量化されるが、その内容、つまり記載された事象が、自然に関することなのか、ミュージアムのことなのかといったことはばやけてくる。そこで各人の報告書に記載されている内容を個別に検討する方法をとった。

さて、報告書に記載されている項目として最も多いのは、枝幸の自然であった。次に活動拠点となったオホーツクミュージアムえさし、そして高校生との交流、漁業と食事が続く。着目しておきたいのは、頻度よりはその記述内容である。

まず、枝幸の地理的位置に関して、ビーチコーミングした際に目にした漂着物に書かれているロシア語からロシアが近いという記述が3人に見られた。首都圏ではロシア語を身近に感じることがないこともあり、国際情勢は別としてオホーツク海という地理性が価値を有することになる。次いで自然に関しては、海、河川、山、森林そして動物類の存在が印象的に書かれている。特に野生のシカは学生にとって新鮮で、過去に枝幸を訪問した学生も同様に感じていた。そして市街地の風景については昔ながらの建物が「レトロ」という肯定的な評価に結び付いている。

ミュージアムの記述では、7名の学生が展示内容に言及しているものの、理解には差がある。例えば、シャチやデスモスチルスといった自然系展示だけを取り上げている場合や、高校生が発見した「金の刀」、竪穴住居に関して記述はあるが、

「オホーツク文化」という包括的な表現は記載がない。これをみるに自然風景が直感的に受容されるのに対して、埋蔵文化財、歴史的展示物を「理解」していくのには知識が必要で、時間がかかるといえそうである。

高校生との交流授業では、事前に参加学生のプロフィールを送っておき、その学生におすすめの枝幸観光を提案するという内容であったが、それに加えて都会の高校との違い、方言の話、高校生にとっての日常であるセイコーマートの話などが展開したことに、学生の評価が上がった。

このほか、三笠山展望閣にあるカフェにおいては、眺望に対する感激は言うまでもなくスタッフと会話したことが具体的に書かれていて、コミュニケーションの機会そのものが潜在的資源になっていると思われる。

### 3.2 動画制作

報告書に続いて、学生が作成した動画について考察する。学生はCMを意識した30秒の動画とストーリーを持たせた3分の動画を作成した。実習前にこの課題を伝えてあることから、学生は枝幸町での活動に際してスマートフォンで動画の撮影を行い、後日動画の編集を行い、11月～12月にかけて、30秒動画、3分動画の試写会を行った。

滞在期間中に限られた活動で撮影しているので、情報量は限定されている。しかし、どのような場面を撮影し、それを編集しているかを考察することで、参加者、首都圏の大学生が認知した枝幸を読み取る一助になると考えた。

はじめに30秒動画について取り上げる。9人の学生がそれぞれ5作品を作成した。報告書では言及の少なかった食をテーマにした動画を9人中8人が作成している。場面構成としては、実際に食べるホタテや毛ガニ、海鮮丼を、枝幸港でのホタテの水揚げ、徳志別川さけ・ます捕獲場、いくら作り、ホタテ貝殻剥きの様子と結びつけた作品である。このほかグループ活動中に訪問した歌登の養蜂家に絞った作品もある。

報告書同様に自然風景を取り上げた作品も多

い。神威岬、ウスタイベ千畳岩、三笠山展望閣からの風景、さらに車窓からの風景や夕方の空を加えた作品などがある。活動拠点としたオホーツクミュージアムえさしをテーマにした作品は3点ある。作品は30秒で作成するという縛りがあったので、取り込んだ場面は展示の一部となったが、デスマスチルス、シャチの骨格、竪穴式住居、昭和の風景展示が取り上げられている。これを見るに文字による解説ではなく視覚的にインパクトの強いものが取り上げられているといえる。

このほか、道の駅マリーンアイランド岡島とお土産、三笠山展望閣に絞って作成したものや、枝幸町で出会った人の笑顔を撮影したものがある。

次にストーリーを持たせた3分の動画を見てみよう。ここでは3年生の6人の動画を対象として、どのようなシーンがどのくらいの時間をかけられて映像化されているかを調べてみた<sup>注3</sup>。

まず作品のタイトルは次のようである。Adventure tourism (日/英)、The changing of Esashi's railway (英)、Natural scenery in Esashi town ~癒やしの世界へ (日/英)、最高の思い出ができる・枝幸町 (日)、都会疲れのあなたに (日)、無題 (日)。外国語学部の学生であることから英語や中国語を音声またはテロップで入れることも推奨した。全般的な構成では、実習した内容を端的に紹介する傾向や、都会での生活から解放されることをテーマにしたものもある。ある学生の作品では、枝幸での学びをビー玉で表現し、シーンが進むにつれて瓶がビー玉で満たされていく演出をしている。

6人の動画の総時間数は2191秒で、主なシーンごとの時間数と構成比は表の通りである。「自然」の項目で時間的に最も多いのは、海のシーンで、502秒(22.9%)を占めている。山や森林

注3 4年生は卒業研究執筆時期にあり、各自の動画の場面再確認の依頼を控えた。なお考察対象にはしていないが、中国語専攻の4年生の作品は、中国語のテロップが付けられている。

注4 廃線紹介の作品は多くの部分は静止画にテロップが重ねられている。これを除外するとミュージアムの紹介は176秒(8.0%)になる。

注5 その他にはカヌー体験、宿泊先、三笠山展望閣、地図やロゴなどつなぎのシーンなどが含まれる。

などが次ぐ。ただ、宿泊先うたのぼりグリーンパークホテルと活動拠点ミュージアムの道中には牧場も多いが、動画に登場する時間はわずか12秒であった。市街地の風景に関しては北見枝幸駅跡や飲食店街が描かれている。

オホーツクミュージアムえさしを取り上げた動画に関しては、報告書同様に自然系展示物を被写体としたものが多く、埋蔵文化財に関しては28秒(1.3%)であった。また国鉄廃線をテーマにした作品があり、枝幸町観光協会の展示内容も含まれるが、ここではミュージアムに分類した<sup>注4</sup>。食に関しては、学生たちの関心も高い。30秒動画の構成と同じく、食事と実習の様子を連動させて表現している。今回の実習では、北見幌別川でのカヌー体験が目玉メニューになっていたが、カヌー実習時には漕ぐことで精一杯で携帯を撮影する余裕がなかったと思われる。そのため動画に組み込まれた時間は少ない(46秒、2.0%)。

#### 4. 考察

報告書と動画に描かれた枝幸像と、先に示したアトキンソンの4つの指標を合わせながら、考察してみる。まず自然に関しては評価が高い。特にオホーツク海を見るのが初めてと言うこともあるが、河川、木々や動物類も含めた視野に入る空間そのものが、感覚的に印象に残っているといえよう。神威岬付近で赤い実が何の実かという質問があった。ハマナスの実であったが、このような地域住民にとっては日常の風景も学生にとっては

表 動画に取り込まれた主要場面

場面	総時間数(秒)	%
自然	791	36.1
市街地	145	6.6
漁業	185	8.4
ミュージアム	280	12.8
食	280	12.8
その他 <sup>注5</sup>	510	23.3
総合計	2191	

非日常の経験であった。おそらく流水時期に訪問すれば、クリオネも学生にとっては興奮する経験であろう。

次に、文化に関して述べる。実習前の6月中旬から事前学習<sup>注6</sup>を開始し、その中には文化に関連する事項も含まれていたが、結果的に学生の文化に関する興味はあまり高くないようである。文化の定義に関する論考は差し控えるとして、日常生活の様式としての文化と博物館の展示という二つについて考えてみる。生活様式に対しては、ホタテの水揚げ、徳志別川さけ・ます捕獲場に関しては報告書でも動画でも取り上げられている。これは眺めているだけでいいので、いわば風景として認知されているとも言える。一方、オホーツクミュージアムえさしの展示に対する関心を見るに、埋蔵文化財や昭和の歴史的展示物に対する反応が必ずしも高くない。展示物の説明文を読んで理解する必要があり、かつ展示に連続性があることから、短時間での見学だけでは自分の知識とならないのかもしれない。したがってミュージアム見学の際には、学生の日常生活との接点を作り出しておくことが有益に思える<sup>注7</sup>。この点は筆者の次回への反省点である。

アトキンソンの三つ目の指標である食事に関する学生の反応は、評価が高い。ホタテや鮭、毛ガニは、いまやどこでも食することが可能であるが、水揚げや徳志別川さけ・ます捕獲場の様子を見ることは、枝幸の「現場」でしか経験できない。枝幸町において、食卓に上がるまでのストーリーを

注6 枝幸町および周辺の観光スポット、枝幸の産業に関する学習、枝幸高等学校との活動準備、ミッションであるCM作りのためのYouTube動画の閲覧などを行った。文献的には枝幸町史のなかの昭和の枝幸漁業、北海道博物館および北海道大学総合博物館の展示資料、1964年当時の国鉄時刻表、藤本強(2009)の「北の文化」などを提示し、その上で司馬遼太郎(2009)『街道をゆく38オホーツク街道』を購入するよう連絡した。ただ授業回数の関係で、授業時に詳細にわたり言及することはできなかった。

注7 例えば、学生にとってもなじみのあるゴールデンカムイを導入に使うことも可能であろう。中川裕(2019)『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』の記述の中には、砂金の話もあり、枝幸と関連付けることができよう。

注8 2018年胆振東部地震で実習が途中中止になったときの学生は、いまでもふるさと納税で家族共々、枝幸の関係人口になっている。

体験できたことは、これから先、海鮮物を食べるごとに記憶の再生がなされるであろう。このようなストーリーを形成できる機会が提供されることこそ枝幸の観光資源である<sup>注8</sup>。

学生の学習に関してまとめると、文化事象に対する興味を抱かせ、それを自分の中でストーリー化させる、そして文献活用などの主体的な学習に移行していくという研究活動の基本姿勢の育成が求められる。ただ、実習期間中に自由散策をした学生の中には、漁港で出会った町民に話しかけをして、プログラムに予定していないサケの水揚げやホタテの加工工場の見学をさせてもらった学生がいる。このような自主的な活動に移行できる素養もある。これには、枝幸町民の外部者の受け入れ姿勢があってこそ実現できるものである。枝幸の人はやさしいと表現した学生が複数いた。この人とのコミュニケーションは、ネット化、AI化する社会の反動として今後の観光にとって重要な要素になる可能性がある。

このほかビーチコーミングではロシア語が表記された漂流物が確認できたと報告書や動画に取り上げられていたが、外来種オニハマダイコンの除去もわずかながら経験した。このビーチでの活動は、広くSDGsの学びともなる。

## 5. おわりに

観光は、その語源として国の光り輝くところを見るという意味である。見るという観光の形態には、食事を楽しむ、スポーツを行う、イベントに参加するなどの広義での体験という行為が付加された。そして今日では生活感覚を享受するというスタイルまで観光と見なされるようになった。「自己対話、自己実現・学び、繋がりを求め、人々は旅する」。「訪れた地でしか味わえない“驚き”、そこならではの“ライフスタイル”、“よりリアルな異日常体験”」を求めるスタイルが追加されている(経済産業省2021 p.4)。この観光行動の変化は、今回の実習において、ある4年生が報告書に「普通なら体験できない普遍的な日常」と書いたことに一致する。これはまさに枝幸の観光を考える上でのキーワードであると思う。

この学生はまたこうも書いている。「出発の日が近づくにつれて、ずっと会っていなかった誰かに会うようなドキドキ感」。新型コロナウイルスの影響で実習を見送ったために、一年間かけて得た知識としての「枝幸」が、今回の実習で実体験の「枝幸」へとつながった。このような経験は、仕掛け方次第で一般の観光客でも可能であろう。

さらに筆者は、枝幸までの道のり、所要時間が枝幸の潜在的な観光資源になると考えている。旭川、紋別、稚内の空港からいずれも2～3時間かかる。道路ナビが故障したかと思えるような時間の後で到着する枝幸町は、都心部では体験することのない感動である。これは時間のマジックとも言える。

アトキンソンは日本の観光立国戦略を示したが、枝幸町の場合、大衆化された観光資源とは違う要素にも観光資源としての価値を見いだすことがよいと思われる。

## 謝意

今回の実習は、枝幸町の様々な部署のご理解とご支援があってこそ実施できたものである。特にオホーツクミュージアムえさしの高島孝宗館長、立石淑恵学芸員をはじめスタッフ皆様、ブランド推進本部脇本勝幸参事、まちづくり推進課レ・ホアン・キム・ガンさんには実習の前後を通して多大なる支援をいただいた。ここに心からの謝意を表す。

## 参考文献

- アトキンソン D, 2015, 『新・観光立国論』. 東洋経済新報社, 東京.
- 経済産業省, 2021, 『スマートリゾートハンドブック』: p.4. [https://www.meti.go.jp/policy/mono\\_info\\_service/mono/creative/downloadfiles/fy31/handbook2.pdf](https://www.meti.go.jp/policy/mono_info_service/mono/creative/downloadfiles/fy31/handbook2.pdf), 参照2023年1月21日
- 司馬遼太郎, 2009, 『街道をゆく 38 オホーツク街道』. 朝日新聞出版, 東京.
- 中井和子, 2009, 「シリーズ「景観文化考」(2009年4月号-2010年2月号)」『開発こうほう』.

- 一般財団法人北海道開発協会, 札幌市.
- 中川裕, 2019, 『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカムイ」』. 集英社, 東京.
- 藤本強, 2009, 『日本列島の三つの文化—北の文化・中の文化・南の文化』. 同成社, 東京.
- 山川和彦編著, 2020, 『観光言語を考える』. くろしお出版, 東京.



写真1 宗谷管内さけ・ます増殖事業協会徳志別川さけ・ます捕獲場見学



写真4 養蜂業者訪問



写真2 いくら作り体験



写真5 ドローン操縦体験



写真3 カヌー体験



写真6 ホタテ貝殻剥き体験